

第73回日本放送協会放送文化賞・受賞者資料

《五十音順》

つづく あいichろう
都竹 愛一郎 氏(66) 《名城大学工学部電気電子工学科教授》



電波研究の第一人者として、放送局から視聴者にきれいな映像音声が届くよう、伝送技術の研究指導に取り組み、放送分野における国内外の標準化を進めました。地上デジタル放送の実現にあたっては、送信施設である東京スカイツリーの回線設計や場所選定にも関わり、またNHK放送技術研究所における地上テレビジョン放送の高度化技術に関する研究開発で運営委員会の座長を務めるなど、放送技術の発展に貢献しています。

はなやぎ いとゆき
花柳 糸之 氏(83) 《舞踊振付家》



『NHK紅白歌合戦』や『思い出のメロディー』など数々の歌謡番組において、50年以上にわたり振付を担当。伝統芸能で培われた豊富な知識・技術と自ら磨き上げた柔軟な発想でステージの表現を広げ、多くの視聴者に愛される歌謡番組を献身的に支えました。多くの歌手から信頼を集めるその人間性や情熱は、エンターテインメントの制作現場やスタッフに常に活力を与え続けています。

ピーター・バラカン 氏(70) 《ブロードキャスター》



1974年の来日以来、堪能な日本語を駆使してテレビ・ラジオの第一線で活躍。FM『ウィークエンドサンシャイン』のDJを1999年から務め、古今東西の幅広い音楽を長年日本のリスナーに紹介する一方、NHK WORLD-JAPAN『Japanology Plus』では、深い洞察力と親しみやすい語り口で、前身番組も含めて19年にわたり、日本の文化を世界に向けて伝えるなど、国際社会と日本の架け橋として貢献し続けています。

ふじい かつのり
藤井 克徳

氏 (72) 《NPO 法人 日本障害者協議会代表》

視覚障害がある中、障害者団体のリーダーとして1970年代から活動。NHKの福祉番組に、企画、情報提供、調査協力などで長年にわたって協力してきたほか、2006年の「障害者自立支援法」制定以降は、番組にたびたび出演。東日本大震災後の「障害者と防災」や、相模原事件後の「優生思想をめぐる問題」などの重要なテーマをナビゲーターとして伝えるなど、福祉番組の先導的役割を果たしています。

ますだ あけみ
増田 明美

氏 (58) 《スポーツジャーナリスト、大阪芸術大学教授》

女子マラソン引退後、スポーツコメンテーターとして活躍。豊富な知識と軽妙な語り口で、女子マラソンの魅力を視聴者に伝えてきました。アトランタから東京まで7大会連続でオリンピックの解説者を務めたほか、東京パラリンピックでも解説やスタジオ出演で放送を支えました。また、連続テレビ小説『ひよっこ』のナレーションをはじめ、子ども向け、教養、バラエティなど幅広い番組で活躍し、視聴者の支持を得ています。

みわ あきひろ
美輪 明宏

氏 (86) 《歌手、俳優、演出家》

独自の美意識で60年以上にわたって活動を続け、2012年に77歳で『NHK紅白歌合戦』に初出場。その後4年連続出場を果たし、長崎での被爆体験や故郷への思いなどを込めた歌は大反響を呼びました。大河ドラマ『草燃える』『義経』や、連続テレビ小説『花子とアン』での語り、さらにEテレ『にほんごであそぼ』『美輪明宏 愛のモヤモヤ相談室』への出演など、多彩な活躍で番組を支え続けています。